

私の戦争体験

八女市 緒方 由子

初めまして、私は今年63才を迎え現在八女の方に住んでおりますが、戦争を体験いたしましたのは大牟田の方に住んでおりましたのでその時でした。あの頃は皆さん大なり小なり体験されたのではないのでしょうか。

あれは13才の時です。戦争もひどくなり、学校でもいろいろと大事な時のために訓練をいたしました。でも空襲がひどくなるばかりで、学校の方も休校が多くなり始めました。空襲も毎日のようになり、空には日本のともアメリカともわからない飛行機が編隊を組んで飛ぶようになり、その音も大きく頭の上を飛ぶのです。

そのような日々の中、病気がはやりだしまして、赤痢や疫痢です。私の母や姉も病気になり良いクスリすらなく、姉はどうとう亡くなりました。その時葬儀もできず、姉を安置するお棺すらありませんでした。父が自分で作って眠らせたと思います。それだけではなく誰にも送られず父と私とで柩をリヤカーに乗せて送っていくことになりました。

でも空襲がいつくるかも知れません。父が心配して一人で行くと言って父一人送ったのです。今思えばその時の父の心の内はどんなだったろうと胸が痛みます。

姉が亡くなり、いく日めでしょうか。いつものように警戒警報が鳴り出しました。それが鳴り止むか止まないうちに敵機襲来が鳴り始めたのです。私達はバラバラに逃げました。父は母を安全な場所につれて行かなければ行けないので、一人どこをどうして行ったのかおぼえていません。

空が明るくなったと思ったらヒューと音がして「バンバン」と言うような音とともにあちらこちらと火の手が上がり始めました。安全な場所などあるはずありません。でも、逃なくってはと思い、毛布やリックを背負い、安全な所を求めて逃げまどいました。

どのくらいの時間がすぎたのでしょうか。父の大きな声を耳にし、急いで防空壕に入り、その夜は、いいえその夜だけではありません、いく日もいく日も、眠ることなどできませんでした。その夜も、もちろんのこと一睡もなく、恐さで身がふるえる思いで、ただひたすら神様に祈りました。

ふと気が付くと、外が明るく見えてきたのです。外は無気味なくらい静かでした。私は父があぶないといったのですが、そっと外に出て見ました。あたりはしんとして怖いくらいでした。しばらくして人が通り始めました。その人々の顔は恐ろしさのためだと思いました、青ざめこわばった顔、恐い顔、人間の顔ではありません。その中には赤ちゃんをおぶったお母さんが通りました。ふと見ると赤ちゃんの足や手が焼けただれているのです。なんといって説明したらいいのでしょうか。私にはとても説明できないほどでした。

あっと思っただけで見ていると、戸板に乗せられた若い人が親らしき人に運ばれて、あちこちと病

院を探しておられました。若い人は娘さんらしく、名前をよんで「ガンバッテ」といくどもいくども名前を呼んで、運んで行かれる人々、それはそれは口でいい表せないくらいの光景でした。ほんとうにニュースで見てた場面でした。

ここまでは私の体験はさほどのことでは有りませんが、それからが大へんでした。母の病気が重くなり、父の生まれ故郷につれて行くことになりまして、でも車などありません。リヤカーでつれていくのです。父と私で引いて行きました。でも私など何にもなりません。父が一人で引いて行くのです。それも夜だけを歩いて八女の地までです。13歳の私の足には辛く悲しい道でした。でも父はもっとつらかったと思います。そうです、夜だけ歩くのですから八女の地へつくまでいく日めだったか、また時間は……さだかではありませんでしたが、八女の地へ着いたのは明るく空がしらみはじめた頃でした。父が一休みしようと言った時が黒木村に近い所でした。

そこで食事を取ることになり、父が食べる物を頼んでいる時でした。大人の人が静かにしてと言われてラジオの場所に皆行かれるのです。何かかと、子供心にわかりました。静かにしていると突然天皇のお声が聞こえて参りました。でも子供の私には言葉のすべてはわかりませんでした。天皇が言われました。

「しのびがたきをしのび、たえがたきをたえ」そのお言葉だけは今も忘れることはないでしょう。そうです戦争が終わったのです。父が急に泣き出しました。いいえ父だけではありません。大人の皆さんが声を出して泣きました。皆、心の内は複雑だったでしょう。

そのような日々が過ぎ、母を病院へ入れて父を八女の地へ残し、私は学校が始まるかもしれないので、また大牟田の方へ帰りました。戦争は終わっても私達の戦争は終わっていませんでした。

あれは大牟田に帰って三日ぐらいしてのことです。大へんなデマが流れ出し始めたのです。アメリカの兵隊が上陸して女子供は連れていかれたり、殺されると恐ろしいデマです。私達はまた八女の地へ行くことになりました。でも私の家は旅館を営んでおりまして、父の姪の方が手伝いに来ておられていて、子供が一人それも赤ちゃんです。その赤ちゃんも連れていかなくてははいけません。

私の恐ろしい、また悲しい体験はこれからが辛い体験なのです。私と姉は汽車で八女まで行くことになり、姉がそうなんです、私にはもう一人姉がいました。その姉が荷物を持ち、私が赤ちゃんをおぶって汽車に乗ることにしたのです。私達は駅へ急ぎました。戦争は終わったとはいえ、辺りは焼け野原です。乗り物などあるはずありません。また、ひたすら歩いて駅へ。でも駅へ行く人は私達だけではありません。皆安全な場所へと急いでいるのです。

駅へ着くと人、人、人です。赤ちゃんをおぶってる私が汽車に乗ることができるか心配でした。でもどうにか中に乗ることができました。でも身動きすらできません。私は赤ちゃんが心配でした。泣き声一つしません。どのくらいの時間がすぎたでしょう。女の方が「赤ちゃんがへんですよ」と言われました。でもおろして見てやることもできず、姉がそっと赤ちゃんの口

に手をあててみました。姉が涙声で「死んでる」と小さい声で……。赤ちゃんは人にもまれ、窒息したのです。

こんなことがあっていいのでしょうか？涙が流れ、落ちるさえ、また、悲しかった。私は赤ちゃんをおぶったまま八女の地へ着くのを待ちました。赤ちゃんの足を私の手で強く強くにぎりしめて、八女の地へ着いたのは夜でした。バスもありません。父さんの所まではまだまだです。私達は、あるバス停まで歩くしかありませんでした。

歩きながら、泣けて泣けて、ひたすら歩きました。私の背には冷たくなった赤ちゃんが、いえ名前は「せい子」です。その「せい子」が冷たくなって、どんなに苦しかったことでしょう。可哀相に、戦争の世の中に生まれてきて、短い一生を汽車の中で終え、私の背におぶさり母さんの胸にも抱かれず、死んでいった「せい子」ちゃん。私の頭の中、心の中は悲しみでいっぱいでした。私と姉は黙って歩き、あるバス停で夜を明かしました。冷たくなった「せい子」は私の背で夜を明かしたのです。13才の女の子が死んだ赤ちゃんをおぶり、夜を明かすなど考えられないこと、これも皆戦争のもたらした悲劇です。どうぞこのような悲しい事が今の子供達にないよう、このような字で書かせていただきました。「せい子」の供養と思って読んで下さいませ。